

# 話しことば単元における授業仮説（話題）の検討 —「学級討論会をしよう」を手がかりにして—

内田 由香利

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2018年10月30日受付、2018年12月10日受理)

## 要 旨

話しことば単元は、学校現場において、「話す・聞く」という行為が無意識のうちに行われているため、指導目標・内容・方法が曖昧になりがちである。本稿では過去の学級討論会の授業実践における仮説について、大村はま氏の先行研究を基に検討した。特に、「話し合いの仕方を学ばせる際の話題設定」については、教師自身が「討議を経験させること」と「討議を教えること」との明確な区別を意識し、国語科の範囲から適切な話題を選ぶ必要があることが分かった。小学校国語科における話しことば単元の指導における適切な話題の具体については、「話す・聞く」領域の年間指導計画を作成し、今後検討していきたい。さらに、児童個々の考えの整理、それを基に話し合う際の手だてとともに、評価方法・内容についても研究を継続したい。

## はじめに —本研究の目的—

筆者は、小学校に勤務していた時（2004年）に、『伝え合う力』・『考える力』を育てる国語科学習指導法の研究」と題して、実践研究論文を執筆した。音声言語単元の年間指導計画を作成し、「話す・聞く」力を高めようと継続指導を行ったという内容である。北九州市の教育論文に応募し、優良賞を受賞した。本稿では、その中から学級討論会に関する授業を取り出したうえで、改めて国語科の研究対象として見直し、話しことば教育を研究する礎石にしたい。

実践研究論文は、(1) 授業の仮説／(2) 単元名／(3) 単元目標／(4) 指導計画／(5) 本時の主眼／(6) 学級の実態／(7) 授業展開（討論会ワークシートも記載）／(8) 討論会での児童の発言／(9) 授業後の児童の変容（振り返りカード、アンケート調査による）／(10) 授業の考察の内容である。

これらは、仮説—検証方式を踏んでおり、考察・検討しようとするば（ア）授業仮説の検討（(1)の授業仮説を取り上げて）、(イ)単元構想の検討、((2)単元名(3)単元目標(4)指導計画を対象にした)、(ウ)本時授業の検討（(5)本時の主眼(6)学級の実態(7)授業展開(8)討論会での児童の発言(9)授業後の児童の変容(10)授業の考察を取り上げて）という3段階の考察が必要になってくる。

本稿では、その出発点となる（ア）授業仮説の検討を取り上げたい。もちろん、具体的な問題になると、（２）単元名以下の説述も盛り込むが、それでも（ア）のような授業仮説が立てられるのかどうかを最大限細やかに見ていき、何に基づいて、どのような授業仮説にすべきであったかを探っていくことにしたい。

## Ⅰ 単元「学級討論会をしよう」（６の１の決まりを考えよう！）の授業展開

以下は、投稿した論文を抜粋したものである。

### （１）授業仮説

学級討論会において、①話し合う必然性のある話題を設定し、②根拠を基に自分の考えを整理する手だてを工夫する。また、振り返りとして③話し合いへの適切な自己評価を繰り返せば、言葉で伝え合う力が高まるであろう。

- ① 話し合う必然性を感じることができるよう、自分の生活に直接かかわる身近な話題を設定する。本時では、学級の決まりを見直すという討論を行い、「シャーペンを使ってもよいか」という話題を設定する。話し合うことにより、学級の決まりを変えることができるかもしれないという場面設定により、話し合いへの意欲を高める。
- ② 自分の考えを整理するために、ワークシートを準備する。また、事前の情報収集やインタビュー活動を設定し、根拠を明確にして話し合うことができるようにする。
- ③ 話し合いに関する自己の目標を明確にさせ、討論の様子をVTRや評価カードを使って自己評価させ、自己の変容を自覚できるようにする。

### （２）単元名 「学級討論会をしよう」（６の１の決まりを考えよう！）〈６時間〉

#### （３）単元目標

- ① 自分の意見や立場をはっきりさせて、考えを分かりやすく話したり、ともだちの考えを自分の考えと比べながら聞いたりして、伝え合うことの楽しさや多様な考えを知る楽しさに気づくことができる。
- ② 討論会の進行方法を理解し、自分の考えや根拠をはっきりさせて討論会に参加することができる。
- ③ 話し手の主張を、その理由を考えながら聞き、自分の考えと比べることができる。

学習指導要領では、６年生「A話すこと・聞くこと」の指導事項として、「エ話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめること」「オ互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うこと」が挙げられている。ここでの討論は、学級会のように一つの物事を決定するだけの話し合いではない。一つの問題に対して、自分の考えや主張したいことを、相手にわかりやすく例を引いたり、具体的なデータを挙げたりしながら、適切な表現方法を工夫して述べ合うことができるようにすることをねらいとしている。自分の思いや考えを伝えるために、「自分の意見との違いを考えながら友達の意見を聞

くことができたか」「説得力のある話し方ができたか」「自分の考えがほかの人にうまく伝わったか」ということが、各自の学習目標となる。

#### (4) 指導計画 (6時間)

- 1、教材文を読み、討論会のねらいや準備、進め方について大まかな流れを知る。
- 2、教材文の話題「学級文庫にまんがをおくのはよいか」について、自分の考えもつ。討論会に参加する時の発言の仕方を話し合う。(「議論の筋道に沿って」「説得力のある話し方で」「相手の発言に応じて」)
- 3、討論したい話題を決める。グループの役割を決める。
- 4、自分の立場を明確にして、グループで話し合いの進め方を確認する。
- 5、グループに分かれて、1回目の討論会を行う。(議題「早く大人になりたいか」)
- 6、グループに分かれて、2回目の討論会を行う。【本時】  
(議題「シャーペンを使ってもよいか」)

#### (5) 本時の主眼

シャーペンの使用について、友達の意見を自分の考えを比べながら聞いたり、自分の考えを相手に分かりやすく伝えたりすることができるようにする。

#### (6) 学級の実態 <第6学年1組35名(男子18名、女子17名)>

この授業前に、アンケート調査を実施した。〈質問1〉いろいろな話題について、話し合いをするのは好きですか。〈質問2〉授業中に、友達の話を聞くのは好きですか。〈質問3〉授業中に、友達の前で発表するのは好きですか。〈質問4〉スピーチは好きですか。〈質問5〉友達を説得するような話し方ができますか。〈質問6〉話し合いの時、友達の考えをしっかりと聞いて発言できますか。という項目である。その結果は、以下の通りである。

- ① 人前で話したり、自分の考えを伝えたりすることに抵抗がある児童が多い。
- ② 毎朝のスピーチ活動で、準備をして人前で話すことには少しずつ慣れてきている。
- ③ 学級会における話し合い活動も積み重ね、話し合いの仕方は身につけてきた。

これまで、学級会で色々な決め事を行う際に、理由をつけたり、そう考える根拠を示しながら発表したりする機会を増やしてきたことから、「説得する話し方」へ言及する児童が多かった。また、「しっかりと聞くこと」で自分の考えを広げたり深めたりできる機会があるごとに確認してきたため、「聞く」ことへの意欲を高める児童も多数いた。

高学年になり、発言の回数が減ってくるこの時期に、友達の考えを受けとめたうえで、自分の意見を相手に分かるように話し、その中で学級の決まりが作られていくという経験をもたせる。そして、自分の意見を進んで発表しようとする意欲づけを行い、伝え合う力を高めるうえでも、意義深いものであると考え授業を行った。

(7) 授業展開

<本時の討論題> 「シャーペンを使ってもよいか」

【表1 本時の授業展開】

表1のような展開で授業を計画した。

指導に当たっては、十分な取材の時間を取ることで、グループでの話し合い活動において、より多くの児童に発言する機会を与えることなどに留意し、どの児童も進んで討論会に参加し、活発な討論が展開するようにと心がけた。そのため、発言の手がかりとしてワークシートの積極的活用を行った(表2)。論題についての自分の考えや友達の意見を聞いての共通点、自分の意見との相違点、質問のメモ欄を設け、自分の考えをもち、それを整理できるようにした。さらに、ワークシートを手がかりにしながらかつ話が広がり、友達との意見の交流を通してさらに自分の考えが深まるようにした。事前の準備としては、それぞれの考えをもつ大人へのインタビューを提案した。児童は、インタビューによる大人の意見は説得力があると考え、インタビューへの意欲を高めた。結果として、これが「人の話を注意深く聞くこと」や「様々な人の多様な考え方に触れること」にもつながった。

学 習 活 動	教師の支援と手だて	評 価 規 準
1, 本時のめあてを確認する。 めあて	・これまでの学習をふり返り、本時の討論会への意欲づけを図る。	進んで話し合い活動に参加しようとしている。 (緑子の観察)
「シャーペンを使ってもよいか」という話題について、友達のことを自分の考えと比べながら聞き、自分の考えを分かりやすく伝えよう。		
2, 「討論の時の注意点」を確認する。	・これまでの学習をもとに、特に説得力のある話し方や、相手の主張をふまえての発言の重要性について確認する。	
3, 討論会をする。 討論会の手順	・司会の子どもが進行し、話し合いの方向が大きくなった時にのみ、指導する。	友達の発言を聞き、それを受けとめようとして、自分の考えを積
① 開会の宣言、役割紹介	・肯定派、否定派とも自分達の主張を通すために効果的な資料を掲示するようにする。	
② 話題の確認	(インターネットによる資料)	
③ 初めの主張		
④ 質問や疑問コーナー	・机間指導により、プリントへの書き込みが	としている。
⑤ 相談の時間	不十分な子どもに、自分の考えを書き発表の手助けとすべし良いことを教える。	(発言内容 プリント)
⑥ 最後の主張 肯定派・否定派	・聞くグループにも、自分の考えを周りの友達と話し合う時間をとり、考えを友達と比べることができるようにする。	
⑦ 聞くグループからの感想		
⑧ 閉会の宣言		
4, 本時のふり返りをする。	・自分の意見をきちんと伝えることができたか、説得力のある話し方ができたか、友達の意見を聞き、自分の考えと比べることができたかなどについて、ふり返りをするようにする。	

【表2 討論会ワークシート】

## (8) 討論会での児童の発言

1 司会 A それでは、今日は「シャーペンをつかってもよいか」という話題について、話し合いを進めたいと思います。肯定派、否定派、それぞれの立場からまずはじめの主張をお願いします。まず、肯定派の代表の人をお願いします。

2 肯定派 A シャーペンは、使ってもいいと思います。理由は、2つあります。1つ目は、便利だからです。鉛筆のようにいちいち削らなくてもいいし、1本あればいいので持ち運びにも便利です。また、先が丸くならないので、細かい図形や線を描きやすいというよさもあります。2つ目は、大人の人へのアンケート結果からも、実際に使っている人が多いし、大人になっても使うのだから、今からそれに慣れていく方がいいと思うからです(図1)(アンケート結果の表を提示)。



3 司会 B それでは、次に、否定派の人をお願いします。【図1 アンケート結果提示の様子】

4 否定派 A 私たちは、シャーペンを使うことには反対です。シャーペンよりも鉛筆を使った方がいいと思います。鉛筆を使った方がいいという理由は、2つあります。1つ目は、筆圧をかけてしっかり書くことができるからです。とめやはね、はらいなど、形を正確に書くには、鉛筆の方が書きやすいです。シャーペンは、すぐに芯が折れて、きちんとした字を書きにくいと思います。

2つ目は、環境にやさしいからです。鉛筆は、このように間伐という間引かれた不必要な木を有効活用できます(図2)(絵を提示)。間伐材を利用しないと燃やして処分しなければならなくなります。木を燃やすと、CO2も出て地球の温暖化につながります。間伐材で鉛筆を作って



【図2 図表提示の様子】

それを使う方が、環境の為にもとてもよいことだと思うからです。

以上のような流れで、それぞれの立場から初めの主張を行った。鉛筆派が8名、シャーペン派が23名、どちらが良いか迷っている児童が4名であった。鉛筆派は、しっかりした考えをもった女子が多く、計画的に資料や情報を集め、グループで団結し自分たちの主張を自信をもって伝えていた。一方、シャーペン派は、普段は話し合うことは面倒くさいという男子が多かった。しかし、学級で能力シャーペン使用を認めてもらいたいという思いから、一生懸命に相手を説得するための材料を集め発言をしようとする様子が見られた。

- 5 司A それぞれのチームに何か質問はありませんか。
- 6 聞 (否) 肯定派の人に質問です。  
シャーペンが便利だと言っていたけど、すぐに芯が折れて、勉強に集中できないと思います。その点についてはどういう考えですか。
- 7 肯C 芯が折れることは仕方ないと思います。でも、集中できないことはありません。
- 8 聞 (否) カチャカチャして集中できんよね。(隣の友達へ…隣の友達うなずく)
- 9 司B 否定派の人、いいですか。
- 10 聞 (否) シャーペン派の人たちに質問です。鉛筆だったら、芯が折れる心配はないと思うので、鉛筆を使った方がいいと思うのですが、どうですか。
- 11 司A 肯定派の人たちどうですか。
- 12 肯D 鉛筆は、すぐ先が丸くなって、字が書きにくいし、算数で図形を描くときも、描きにくいので、やっぱりシャーペンの方がいいと思います。
- 13 否B 先が丸くなるというのは確かにその通りだと思います。でも、教室には鉛筆削りがあるのだから、休み時間に削れば問題ないと思います。
- 14 否C それに、Dさんは字が書きにくいといいましたが、私は芯がボキボキ折れる方が書きにくいです。
- 15 聞 (否) (多数うなずく)
- 16 否C これを見てください。(友達の漢字のノートを提示) この人は、鉛筆を使って字を書いています。こんなに止め、はね、はらいなどがきちんと書けて、きれいな字になっているのは、鉛筆で書いているからだと思います。
- 17 司A 肯定派の人、今の意見に対して何かありますか。
- 18 肯 確かに字はきれいだけど、シャーペンでも書けると思います。
- 19 聞 (肯) やっぱり鉛筆は、毎日削ったり準備が大変だし、シャーペンなら筆箱に入れておけばいいので、面倒くさくないと思いますが、その点についてどう思いますか。あと、そんなに鉛筆がいいなら、大人になっても使うと思うのですが、あまり大人に人は使っていません。その点についてはどう思いますか。
- 20 否D 準備が大変といいましたが、明日の準備をするときに習慣にすれば、大丈夫です。やってみてください。(相手を笑顔で見る) 大人と子どもを一緒にするのは違うと思います。大人は、筆圧が…とか言わなくても字を書くことに慣れているし、便利なのはわかるので、大人になって使うのは問題ないと思います。
- 21 否 (多数) 準備はできるよね。面倒くさくないよね。(うなずき多数)
- 22 司A 準備が大変という意見については、肯定派の多くの人ができると言っています。他に質問はありませんか。

上記のように、それぞれの主張後、相手の主張も聞いたうえで疑問点をワークシートに整

理し、両グループに質問を行った。途中での児童のやり取りの様子を示したが、自分達の主張に必要な資料を準備し、相手を説得しようと一生懸命に話す様子が見られた。また13、14、20の傍線部のように、自分の主張を通すために、相手が言ったことをくり返し、それに対して自分の考えを出し反論する発言も見られた。また、20の二重線部のように、鉛筆を削ることを笑顔で相手に勧める場面では、場が和む様子も見られた。

この後、グループで相談の時間をとり、最後の主張へと移った。

23司A それでは、最後の主張をお願いします。鉛筆の使用を勧める肯定派のグループからお願いします。

24否C シャーペン派の人の意見を色々聞いてきましたが、やはり鉛筆を使った方が自分たちの成長のためにも、環境のためにもよいという結論になりました。ただ、1本でずっと使えるということや携帯に便利という点では、シャーペンのよさもあるので、どこかへ行くときにはもっていてもよいかという意見も出ました。

25司A 否定派の人の考えは変わらないということでしたが、シャーペンの利便性は認める発言でした。次にシャーペン肯定派の人、最後の主張をお願いします。

26肯D 鉛筆派の人たちの主張を聞くと、地球の温暖化の問題もあるし、環境のことは確かに大切だという意見が出ました。でも、シャーペンでも環境にいいものもあるし、ペットボトルからできるリサイクルシャーペンもあるので、そのようなものを使えばいいという意見が出ました。シャーペンはやはり便利なので、学級の中でも使ってもいいという決まりにしてほしいと思います。

27司B それでは、最後の主張を聞いて、ほかの皆さんは自分の考えを整理してください。(ワークシートに自分の考えを記入)

この後、それぞれが最後の主張を聞いて、自分の考えをまとめた。司会者がどちらがいいと思うかについて挙手を求めたところ、話し合う前は、シャーペン派22名、鉛筆派10名、どちらかには決められない人3名であったが、話し合い後には、シャーペン派19名、鉛筆派8名、どちらかには決められない人8名に変化した。どちらか決められないという児童が増えた。理由を尋ねると、どちらの主張にも説得力があり、どちらにも良さがあると感じたためであった。

ワークシートにまとめたそれぞれの考えを出し合いながら、学級の決まりとしては、次のように決めることになった。「時と場合によって使い分けしていく。基本的に字を書くときは鉛筆を使う。図形を描くときは、シャーペンを使ってもよい。ただし、授業中に壊れたり、カチカチ何度も鳴らしたりしたときは、鉛筆に変える。」である。

最終的には、教師が児童の話し合いの内容を検討し判断した。自由性があることへの不安も出たが、自由の裏側には、責任があるということを確認し、学級の決まりとした。

(9) 授業後の児童の変容

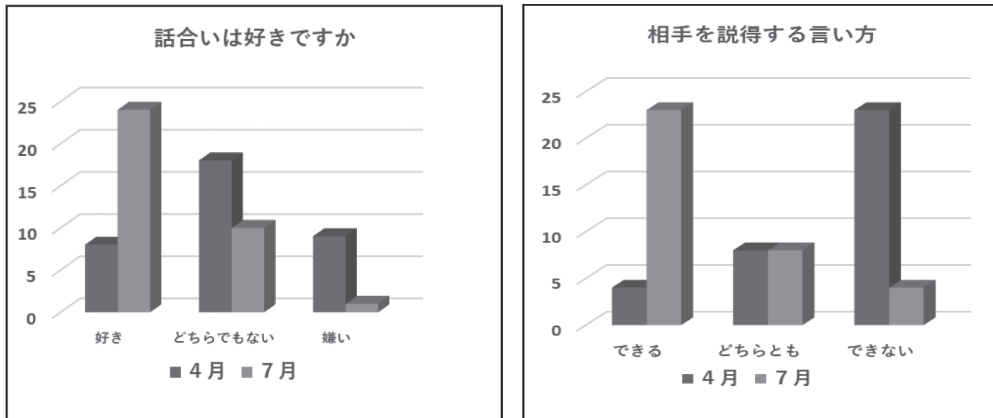
授業後の児童の変容（振り返りカード、アンケート調査）を示しながら、授業仮説に基づいて授業を考察する。

【表4 児童の振り返りシート】

<p>自分たちの学級の決まりだったので、いろいろ調べたりしながら自分の考えを伝えようとした。環境のために鉛筆を使うことを主張したかった。ニコッと笑ってもらえて、ほっとした。シャープペン派の人たちに鉛筆のよさも分かってもらえたと思うので、話し合ったかいがあったと思った。シャープペンの便利さも確かにあると思ったので、見学の時などはシャープペンを使ってみたいと思います。(シャープペン否定派)</p>	<p>シャープペンを使ってもよいことになったのでうれしかった。いろいろ準備して話し合っ てよかった。環境のことを教えてもらって、 これまでは考えたこともなかったけど、大切 かもしれないと思った。シャープペンを使うこ とになったけど、音のこととか集中のことと か、迷惑にならないように気を付けようと思 った。話し合っ て決まりが変わったので、話 し合っ てよかった。これからもいろいろ話し 合っ いで決めたい。(シャープペン肯定派)</p>
--	---

表4のように、話し合ったことへの充実感を味わったことがうかがえる感想が多くみられた。また、自分の考えを伝えることの大切さや伝え方（根拠を示しながら、相手に分かりやすい話し方や方法で）についての記述も目立った。

児童の意識調査（図3）でも学年当初と本単元の学習終了後では、大きな変化が見られた。



【図3 学習前後（4月、7月）の児童の意識の変容】

話し合いが好きかについては、学年当初は、「どちらでもない、どちらかといえば嫌い」だという児童が多かった。理由は、あまり話し合う必然性を感じていなかったり、話し合っ  
てよかったという経験が少なかつたりしたことによるものだった。今回の話し合いは、自分たちの学級の決まりを決めるというものだったため、必然性があったことから意欲が高まったと考えられる。また、相手を説得する言い方については、今回の話し合いでは、資料の準備と話し方という2つの視点をもたせた。「どのような資料を提示すれば分かりやすいか」「どのよ



うな根拠を示せば、相手が自分の考えを理解してくれるか」等について、リハーサルをしてグループで検討したことで、自信をもって話し合いに臨めたことが大きな要因であると考えられる。また児童の感想として、ワークシートで自分の考えを整理できたことで、自分の考えや伝えたいことがはっきりしたという記述が多くみられ、分かりやすい発言や自信をもった発言につながったと考えられる。

#### (10) 授業の考察

授業仮説の中で、言葉で伝え合う力を高めるために、①話し合う必然性のある話題の設定、②根拠を基に自分の考えを整理するワークシート、③話し合いへの適切な自己評価、の3点を授業検証の視点として挙げた。

①については、話し合う話題の必然性が話し合いへの意欲の向上に有効であった。「絶対にシャーペンが使えるようにしたい。」「早く話し合いをして、学級の決まりを決めたい。」等、話し合いへの意欲の高まりが発言や行動から見て取れた。同時に、話し合う価値のある話題かという視点も重要であった。第1回目の話し合いの課題は「早く大人になりたいか」と設定した。初めは、大人と子どもをいろいろな視点で比べながら、意欲的に話し合いを進めていたが、意見交換が進むと、多くの児童が「結局は大人になるのだから、大人になるまでに、子どもの時しかできないことを楽しめばいい」という意見に納得した。話し合っ、友達の見聞を聞き、自分の考えは広がったが、この話題については、話し合う必然性はなく、「おもしろそう」だと一時的に意欲は高まったが、その持続は見られなかった。

②については、自分の考えを整理するために、ワークシートが有効であった。「ワークシートがあったので、自信をもって言うことができた。」「友達のことを書き留めて、自分の考えと比べることができた。」「書いて考えると考えやすい」等の感想や、ワークシートを見ながらの自信をもった発言から、その効果を見取ることができる。しかし、その形式については、より児童の思考の流れに沿って、伝えたい内容を整理できるもの、2つの考えの比較がより明確な形式へと修正する必要がある。

③については、ワークシートを活用し毎時間行った。学習を振り返って、「話し合っよかった点」と「自分自身の考えがどう変わったか」を振り返りシートに書き留めていった。「話し合う前は、シャーペンを使ってもいいという決まりに変えたいという気持ちだけで、鉛筆のよさを聞きたい気持ちは全然なかった。でも、鉛筆のよさを必死に伝えている友達の見聞をじっくり聞いてみると、鉛筆もいいなと思った。」「話し合いによって、考えが変わったり、そんな考えもあるかと、自分が変わる感じもして、話し合いが好きになった。」最後の時間の感想では、「政治とかでも議会の様子が出ているが、寝ている人とかもいて、もっと真剣に聞くと自分の考えが変わることもあるから、話し合いを大切にしてほしいと思った。」というものもあり、話し合いの価値を感じていることが見取れた。

子ども自身が、本当に「伝えたい」情報を、本気で伝えようとするとき、最も効率的にそ

のための方法・技術が身につくと考える。児童の「話合いたい」という本気度が、自分の考えを伝える方法を吟味したり、相手を説得するための話し方を練習したりすることに直結するのではないかと考える。

伝え合う活動において、自分の考えをもったうえで友達のを聞き、その考えを自分の考えとすり合わせながら再思考することで新たな考えを生み出す、そのことが目標であり、新たな思考が生まれる話合いの指導が必要であるといえる。

以上のことから、言葉で伝え合う力を高めるためには、伝え合おうという意欲や伝え合う内容をもつような学習の場をつくり、対話活動によって伝え合うための方法や技術の向上を図っていくことが重要であると考え。その中で、豊かな人間関係や新たなものが生まれ、伝え合えてよかったという充実感が味わえたとき、さらに言葉で伝え合う力が高まっていくと考える。

## II 授業仮説を見直す際の方向性

上記の実践について、授業仮説についての問題は、大きく以下の3点である。

- (1) 学級討論会において話し合う必然性のある話題として、①教材文の話題「学級文庫にまんがを置くのはよいか」②（話題）「早く大人になりたいか」③（話題）「シャーペンを使ってもよいか」を設けるとするのは、国語の「言葉で伝え合う」（対話力を育成するとも言及している）のにふさわしいものであったか。
- (2) 「根拠を基に自分の考えを整理する手だて」として、「話題／主張する立場／初めの主張／予想される質問とその答え／討論会後の自分の考え／今日の学習を振り返って」という討論会ワークシートを使った。また、「それぞれの考えをもつ大人へのインタビュー」を事前にさせることが、討論会で生きていたかどうか。
- (3) 話合いに関する自己の目標を明確にさせ、討論の様子をVTRや評価カードを使って自己評価させ、自己の変容を自覚できるようにしたことで、言葉で伝え合う力（もしくは対話力）を育成することができたか。

## III 小学校6年生の討議指導に合う話題

上記の問題点のうち、(1)の話題について詳説していく。ここで、まず疑問視すべきことは「討論会」としてよかったのかということである。ここで行ったのは「討論」なのであろうか。それとも「討議」なのであろうか。西尾実氏<sup>1)</sup>は、『国語教育学序説』の中で、討議は1対多の話合い、討論は1対衆の公話の組み合わせられたものであるとし、討論と討議の違いについて以下のように説いている。

「討論は、一定の問題なり事件なりに対する賛成者と反対者が、またはそのいずれでもない第三者が、それぞれの主張を立場のわかっていない公衆に演説し、それぞれ公衆を説得し

ようとする、一種の公話（一对衆で行われる）の組み合わせである。しかも、賛成者はあくまで賛成に終始し、反対者はあくまで反対に終始し、第三者はあくまで第三者として終始し、その判定は聴衆のひとりひとりにまかせるという点で、討議と根本的にちがっている。討議は、参加者の共同によって、一つの、最も正しい、最も有力な結論に達しようとする協力である。たとえばいうと、討論は、論者のめいめいが、めいめいの文章を作る営みであるのに、討議は、めいめいが共同して一つの文章を作り上げる営みであるといえる。」

筆者は、「学級討議会」とは言わないと思い、「学級討論会」と聞き慣れた呼称にした。そして、「討論」の語を「学級会のように一つの物事を決定するだけの話し合い」（＝討議）にとどまらず、さらに「一つの話題に対して、自分の考えや主張したいことを、相手に分かりやすく例を引いたり、具体的なデータを挙げたりしながら、適切な表現方法を工夫して述べ合うことをねらう話し合い」の意味で使用した。しかし、戦後、国語教育が児童・生徒・学生の言語生活の指導であることを明らかにした上記の西尾実氏の説述によれば、そのような恣意的な勝手な用語規定は許されないのである。筆者は、ディベートのように賛成と反対の立場、それを聞いて判断する人がいれば討論といえると考えていた。しかし、討論ではそれぞれが公話というまとまった話をするに力点が置かれていたのである。まとまった話をするために専門家として発言できるだけの見識を持ち、みんなをそれぞれが説得し得る人でなければならない、それぞれの立場で言える人は、その立場を代表する人を招くほかない。したがって、国語の授業で出来るようなことではなかった。しかも、その授業中の約束事（立場）として「賛成者、反対者、第三者として終始」するのであって、立場を変えてもよいというような生半可なものであってはならなかったのである。最後に議決するのは討議にほかならず、討論は「その判定は聴衆ひとりひとりにまかせる」ものであり、見識を深められればよく、実践のように最後に一つの結論として議決するものではなかったのである。それは、例えば原子力発電の是非など、専門家を呼ばなければならない問題にこそしなければならなかったのである。したがって、指導計画の1時間目に「討論会のねらいや準備、進め方について」説明し、それから話し合うための準備をするように言って討論会ができるものではなかった。そして、4時間目だけ「自分の立場を明確にして、討論会シートに記入し、グループでの話し合いの進め方を確認する」程度で討論をするような授業はあり得なかったのである。

次に、「設定した話題の適切性」についてである。

この問題について、最も明確な見解を記したのは、管見によれば50年にわたって中学校の国語教育実践に打ち込んだ大村はま氏である。大村はま氏<sup>2)</sup>は、「初歩の討議指導にはどんな話題がよいか—討議のしかたを学ぶ—」のなかで下記のように明言されている。

### 話題を選ぶ

討議を経験させること（討議をしてはいるが、討議する能力をつけること自体を主目標とはしていない時）と、討議を教えること（討議する能力そのものを養うことを目標としている時）とを区別して、初歩的な討議を教える場合の適切な話題を選ぶ必要がある。

### 国語科の範囲から

討議というと、よく、生活的な学級活動の時間を思わせるような話題が取り上げられている。その問題は、中学生として話し合っていること、話し合うべきことであっても、そのような問題では、討議の仕方を学習させることはむずかしい。

中学生にもなれば、人と人との関係もあり、いろいろのいきさつもあり、そのことについては言いたくない、という場合もある。あって当然である。問題によっては、そのことはあまり考えようとしていないという生徒もあり、それはべつに責めるべきことではない。友達との微妙な関係は、問題によっては自由に話させない圧力のようなものになることもある。

そういう人生の問題、生活的な問題を話し合うことは、もちろん必要であるが、それは討議そのものの学習題目には適さないということである。

国語科の中での討議の学習には、その目的に適した話題で討議し、そのようにして養った実力をもって、国語科のなかでも、また、先のような生活的な問題なども話し合っていくわけである。それは養われた討議力の応用の場、活用の場である。

とにかく、討議の指導、とくに初歩的な指導を目的とするときは、国語科の範囲でその題目を選ぶことである。

このことは、指導する側にとっても必要である。後にあるように、討議の中に入って、あるいは生徒の一人として問題を掘り下げたり、広げたり、批判したり、あらたな問題を提出したり、また、時には、司会者に立場をとって、どのようにさばいたらよいか、実際の指導をするというように活動する時、国語科の問題であれば、自由に、じゅうぶんに自信をもって活動できるわけである。縦横につつこんでいくことができ、討議の練習ができる。国語科以外の問題では、さまざまの支障に会いやすい。（本稿は「指導記録による書下ろし」となっているが、筆者の研究授業一覧<sup>3)</sup>を見ると、1961年6月12日に「討議する」という単元名で、ここに掲げた論述の原案が提案されている。）

以上の引用から本実践について言えることは、下記の2点である。

(ア) 討議で目指したことが曖昧だったのではないか

国語科の授業実践において、討議の話題を選ぶ際に、その単元がただ討議を経験させているだけの授業（討議する態度・能力をここでつけさせようとはしていない）なのか、それとも討議の仕方を教える授業（討議する態度・能力をつけさせることを目指す）なのかという目標の見極めが最も肝心であった。国語科ではどんな授業でもつねに話したり聞いたりして

いる。だから、目標にしていなくてもしていなくても、話す・聞く活動をしているから、活動をしておりさえすれば多くの児童については、何らかの力はあるだろうと推測される。しかし、全員について何らかの話す力があるといえるかどうか。そこまで厳密に考えようとすると、目標にしていなかった単元であれば、そこでついた力がたとえあったとしてもあてにしないというのが無難であろう。したがって、目標にしないで身につく力は一応保留しておき、目標にしたときに確実に伸ばそうとするのが教育的であろう。

このように考えると、すべての国語の授業は、聞く力・話す力を意識してつけるか、聞くこと・話すことはさせているが、ここでは聞く力・話す力（態度形成も含む）をつけることを意識せずに他の「読む」「書く」などに力を傾ける単元かに分けられる。そして、討議においても、討議の仕方を意図的に学ばせ、その力をつけようとする単元と、討議はさせるが、例えば国語科の内容について読み深めることに主力を注ぐ単元とに二分されるのである。両者の関係については、当然討議の仕方を意図的に学ばせ、討議力をつける単元があり、討議する力を育てた上で、実際に討議力を応用して読み深めることを目指すという順序性が、学力的には存在するのである。これに準じて、他教科（学級活動など）との関係も、「国語科の範囲から」の4段目にあるように、国語科で討議の学習の「目的に適した話題で討議し、そのようにして養った実力をもって」他教科において「生活的な問題なども話し合っていく」のが本来の道筋なのである。

大村はま氏は、これらのことを中学生を念頭に説かれている。とすると、それまでたどり着かない小学校時点における、学級活動の生活的な問題を取り上げた話し合いは、どう位置づけるべきであろうか。当然、小学校国語科で討議の仕方を理解し、討議力を蓄積する単元を設定して、その活用・応用と確かに言い得る場合のみ、討議力を応用した授業・単元と言える。しかし、そこまでねらいを明確にしていなかったのであるから、単に討議を経験しているだけの授業であったということである。目標は学級活動としてのものであり、討議は手段であるから、討議によりいくらか討議力がついているだろうと教師としては期待する。しかし、討議力がついていなくても構わないし、学級活動としてはどうしても討議しないといけないわけでもなかったのである。教師が提案して、それについて意見をみんなに言わせ、見事な司会で学級会としての目標を達成しても、それで十分だったのである。

(イ) 生活的な話題は適切ではなかったのではないか

討議の話題を選ぶ際に、それが国語科の目標にふさわしいものかどうか肝心だとわかる。教科書教材で「学級文庫にまんがをおくのはよいか」という話題が取り上げられているのも、適切なのかどうか、当然検討の対象になるし、その後、議題として「早く大人になりたいか」と「シャーペンを使ってもよいか」を掲げたのも、国語科の討議で話し合うものとしてふさわしいものであったかどうか、改めて吟味する必要があるわけである。そして、本実践においては、以下のような3点の問題点が浮かび上がる。

①もともと国語科における討議の仕方を学習して、討議力をつける単元として、最もふさわしい話題が選ばれてはいなかった。（「国語科の範囲から」の1段目と照応）

本来真正面から国語科における討議の仕方を学習して、討議力をつける単元として、最も適した話題を選ばなければならなかったのに、教科書に学級会で「学級文庫にまんがをおくのはよいか」が挙がっていたので、筆者はそれを前提にして、学級会にふさわしい「話し合う必然性のある」ものであればよいだろうと思い込んでしまった。しかし、検定に通った国語教科書であっても、国語科で討議の仕方を学ばせるにふさわしい事例になっているかどうか改めて検討するところから始めなければならなかったということになる。そして、国語科の討議にふさわしい話題について今まで一度も考えたことがなかったという事実思い至る。出発点が違っていたのである。

②学習者の一人一人にとって、この話題が国語科の討議に最適であるという吟味がなされていなかった。（「国語科の範囲から」の2段目・3段目と照応）

大村はま氏は、中学生にとって「人生の問題、生活的な問題を話し合うこと」は、対人関係や話題とのこれまでのかかわり方から「言いたくない場合」もあるという。また、「問題によってはあまり考えようとしていない」こともあるが、「人生の問題、生活的な問題」を考えようとしなからといって、国語科の授業で「責めるべきではない」という。そして、「友達との微妙な関係」が「問題によっては自由に話させない圧力のようなものになることもある」とする。いずれも些細なことのようにも見えるが、学習者一人ひとりを考えれば、いずれも無視してよいことではなくってしまう。それが討議をしようという意欲をはばんでしまうからである。

筆者は、授業の考察において、「話し合う話題の必然性が話し合いへの意欲の向上に有効であった。」とし、「話し合う価値のある話題かという視点も重要」としていた。前者については、「絶対シャーペンが使えるようにしたい。」「早く話し合いをして、学級の決まりを決めたい。」など、話し合いへの意欲の高まりが発言や行動から見て取れたことを証拠としている。しかし、そういう発言が「シャーペンを使ってよいか」を話し合う前に聞かれたということであり、児童一人一人と話題の関係を確かめて、全員この話題で大丈夫ということを見据えたわけではない。後者については、「早く大人になりたいか」という話題では、話し合う必然性もなく、話し合う価値がなかったと反省している。一人一人の話題への関係までは捉えていなかったためというのが真実である。

③教師から見て、国語科以外の生活的な話題でどこまで指導力を発揮できるか見極められていなかった。（「国語科の範囲から」の5段目と照応）

筆者は、大村はま氏のように、国語科の問題であれば(a)討議の中にはいって、あるいは生徒の一人として問題を掘り下げたり、(b)問題を広げたり、(c)問題を批判したり、(d)あらたな問題を提出したり、また、時には、(e)司会者に立場をとって、どのようにさばいたら

よいか、実際の指導をすることができると思える着想がなく、実際にどれも試みてはいない。わずかに、本時の授業の終わりに、学級の決まりを示しただけである。授業のための教材研究も十分だったとはいえない。学級討論会と言いながら、ディベートの型式に従って児童を肯定派と否定派に分けて発言させるなど、根本的なところで勘違いしていた。討議の仕方の指導についても、指導書を頼りにCDを使用し、模造紙に書いた手順に沿って確認したにとどまった。そのため、陣頭に立って、このようにすれば討議力が身につくのだと児童に悟らせるという授業にはならなかったのである。討議の展開についても、ディベートの展開に従っており、特別に工夫したものはない。したがって、大村はま氏の言われるように、教師自身が「自由に、じゅうぶんに、自信をもって、自信をもって活動できる」までには至っていない。そもそも話しことばの単元を作り、実践研究の対象にしたのも初めてであり、2004年以降も、この領域について継続して実践研究を試みたわけでもなかったのである。

大村はま氏は、「国語科以外の問題では、様々な支障に出会いやすい」と指摘されているが、筆者は今回研究の対象に据えて、初めて自己の実践が教師の国語科担当者としての力量を存分に発揮できるような話題ではなかったこと、そして本当は当時「様々な支障に出会っていた」ことに、初めて気づかされたのである。話題が国語科の内容の場合には、教師も子どもも、討議と真正面から向き合うことができるということであろう。では、小学生が真剣に話し合い、討議の仕方を身につけることができる国語科に関する話題とは、どのようなものが考えられるだろうか。今後、小学生にふさわしい討議の話題について考えていかなければならない。

本稿では、授業仮説の検討をしようと書き進めたが、(1)の話題の適切性にしか言及できなかった。授業仮説を見直すための視点、(2)「根拠を基に自分の考えを整理する手だて」としてのワークシートと大人へのインタビュー、(3)自己の変容を自覚させるためのVTRや評価カードの検討は、次稿に継続したい。

## 謝辞

九州女子短期大学 子ども健康学科 特任教授・前田真証先生は、本稿の内容の検討及び加筆・修正等、全面にわたって指導してくださいました。深く感謝申し上げます。

## <引用文献・参考文献>

- 1) 西尾実『国語教育学序説』(1957)筑摩書房p.30-31
  - 2) 大村はま『聞くこと・話すことの指導の実際(大村はま国語教室 第二巻)』(1983)筑摩書房p.368-370
  - 3) 大村はま『国語単元学習の生成と深化(大村はま国語教室 第一巻)』(1982)筑摩書房p.484
- 前田真証『話しことば教育実践学の構築』(2004) 溪水社

## Consideration of a class hypothesis about a topic of discussion

Yukari UCHIDA

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

### ABSTRACT

According to Course of Study, each school should be committed to enhancing its instruction to enable students to acquire basic fundamental knowledge and skills, to foster their abilities to think, to make decisions, to express themselves and other abilities that are necessary to solve problems. The use of acquired knowledge and skills can cultivate an attitude of proactive learning and develop students' individuality.

Therefore, to cultivate positive personal and collaborative relationships among students through communication will be more important than current methods of teaching. In this study we examined how to communicate with each other effectively through the class debate. As a result, we found that it was necessary not only to teach the skills of communication intensively, but also pay closer attentions to the students' reactions. And it was also important to consider a topic of discussion. Furthermore, we noted we should make the new materials focus on the development of speaking and listening abilities to foster the active class debate.

Keywords : speaking and listening abilities, class debate, communication, topic